

令和7年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
7	川崎市立さくら小学校	治田 直美

学校教育目標	今年度の重点目標
さくらっ子の笑顔はNO.1 ～ちがいを生かし、共に育つ子の育成～ 【徳】心やさしい子 【知】進んで勉強する子 【体】明るく元気な子	○豊かな情操と感性の育成 ○よく見、よく聞き、よく考え、進んで学ぶ子の育成 ○健康を育み、安全に生活する子の育成

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 人権尊重教育	「ひと」「もの」「こと」とのかかわりを大切に、様々な違いを認め合い他者を尊重する姿勢を育む心の教育を充実させていく。人権尊重教育実践推進校として、日常的な人権尊重教育を推進する。	毎月の児童へのアンケートから、いじめの早期発見・解決や児童の不安等への早期対応に努めた。職員研修を実施するとともに、毎月の人権感覚チェックシートで内容の共通認識を持ちながら、人権意識の定着と向上を図った。	引き続き、児童へのアンケートや日常の観察から、いじめの早期発見と解決に努め、互いの違いを認め合い尊重し合う学校風土の醸成に努めていく。職員への人権感覚チェックシートも、児童に対してだけでなく職員同士も互いの人権を尊重できるように内容を見直し、継続して取り組んでいく。
2 児童指導・児童理解	教職員間の情報交換を密に行って子ども一人一人の状況を適切に把握するとともに、家庭との速やかな連携を図り、早期対応に努める。児童や保護者の思いに寄り添いながら協力して指導に当たる。支援教育COを中心にサポート体制を充実させていく。	児童・保護者の思いや願いを真摯に受け止め、職員間での共通理解を図ったうえで、学校として一貫した児童指導や保護者対応に努めた。トラブルや事故においては、丁寧な事実確認を行い、保護者への迅速かつ誠実な対応に努めた。	職員会議や打ち合わせでの児童に関する情報共有も引き続き行いながら、支援教育COを中心に共通認識をもって速やかに対応に当たれる体制を整えていく。さくらっ子の約束の定期的な見直しを行い、児童・保護者・教職員への周知・徹底に努める。
3 特別支援教育	特別な支援を必要とする児童一人一人の教育的ニーズに合わせて、きめ細やかな指導を進める。個を大切にした指導の充実に努めるとともに、個別に指導・支援が必要な児童を教職員全体で支えていく。	支援教育COを中心に、学級担任・級外教職員がそれぞれの立場からの児童の見取りを共有し、特別な支援が必要な児童への指導・支援について協議・実践し、その充実に努めた。限られた人員の中で、できる限り一人一人の教育的ニーズへ対応できるよう努めた。	特別な支援を必要とする児童は多いが、人員に限りがあるため、情報共有をより丁寧に行い全教職員で児童の支援に当たれるようにする。個別サポートシートの活用と確実な引継ぎを行い、必要に応じてケース会議を開いて一人一人に細やかな指導支援を継続していく。支援教育COを要に、教職員、各サポーター、また関係諸機関との協働・連携を図る。
4 学習指導	学習指導要領に則った指導計画を推進する。教材や学習活動の工夫を行って思考力や判断力の向上を図っていく。学級活動を通じた校内研究を通して、児童の表現する力の育成に努めるとともに、研修や教材研究、研究授業を通して教員の授業力向上を図る。	週2日の帯学習の時間を活用して基礎的・基本的な学力の定着を図るとともに、児童の実態に応じて少人数やTT等による指導を行った。授業中のGIGA端末の活用についてはまだ限定的であり、そこが課題である。校内研究では、学級活動の話合い活動を通して、自分の考えや思いを表現できる子の育成に努めた。	次年度の校内研究では、様々な教科の中で児童が思いや考えを言葉で伝える育むための教材研究や授業の工夫を考えていきたい。また、一人一人がよく考え、対話や交流を通して深まっていく学びの実現を目指して、端末等の有効な活用の仕方や授業改善を促進していく。
5 防災・安全指導	防災訓練の実施、防災教育の推進等により、児童の防災意識を高める。校舎内外の環境整備に努め、安心・安全で気持ちのよい学習環境を作る。	年間5回の防災訓練の実施に伴う事前の防災教育により、児童・教職員双方の防災意識の高まりが見られ、訓練時の行動に生かされた。毎月の安全点検の実施及び、日常の校舎内外の施設設備の確認により、危険や修繕の必要のある個所への速やかな対応ができた。また、B棟全ての教室出入口扉への鍵の設置が完了できた。	次年度以降も、さらにより実際に即した想定で、児童の安全を確保し、教職員が非常事態でも落ち着いて対応できるような訓練とマニュアルの見直し・実践を積み重ねていく。また、月ごとの安全点検と日常的な環境整備への配慮を欠かさずに行う。

6	地域連携	地域の教育力を生かした体験的な学習を進める。学校運営協議会との連携、学校公開日の設定、学校施設の有効活用等を通して、地域に開かれた学校づくりを進める。	ふれあい館や地域教育会議、商店街等の協力を得て、地域人材を活用した、また地域と触れ合う体験的な学習を進めることができた。また、学校運営協議会との連携により、畑の整備等ボランティアの方に学校に関わっていただくことができた。	児童の学習の一層の充実のため、地域の様々な団体や人材とのつながりを大切にしていこう。また、畑整備以外のボランティア活動の幅を広げて学校と地域との関わりの場が増えるように、学校運営協議会との連携の強化を図っていく。
7	情報公開	学校だより、保健・給食だより等の発行、配信メール・学校ホームページの効果的な活用等により、地域や保護者への情報発信を進める。	学校だより(学年だより)等の配布物や配信メール、学校ホームページを通して、学校での教育や児童の様子、学校からのお願いなど、より分かりやすく伝わりやすい情報発信に努めた。一方で、年度末の懇談会などでは、児童の活動の様子を動画で見せるなどの工夫をしても、出席者数がかなり少なく、参加率の低下が課題である。	学校から発信する情報の内容や表現をより分かりやすくなるように精選していくとともに、必要な情報が確実に家庭や地域に届くような伝え方について考えていく。情報発信の工夫により、保護者の学校教育活動への関心を高め、懇談会等への参加率の向上を図りたい。
8	国際教室	国際教室担当と、学級担任、日本語支援員との間で情報共有をしながら、個々の児童の実態やペースに合わせて学習を進めていく。また、国際教室での学習について、教職員が知る機会を設け、協力体制の強化につなげる。	国際教室担当と、学級担任との細やかな情報共有により、一人一人のニーズに合わせてきめ細かな学習を進められた。少人数グループでの共生共育活動なども取り入れ、互いに刺激を受け合いながらみんなで学ぶ体験を通して、日本語に不安を抱える児童も笑顔で自信をもって話すことができた。また、国際教室担当が校内研修を行い、指導方針や実際の様子など共通理解を図った。	日本語ゼロの状態で編入する児童や支援級かつ国際教室で学ぶ児童が増えてきている。個々の実態に応じた指導ができる体制を整えていきたい。引き続き国際教室と担任との連携を大切にしながら、各教室での支援にも共有した情報を生かしていく。また、国際教室での学習の様子について職員研修を行って共通理解を図る。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケート結果はおおむね肯定的な回答でよい。 ・教育相談や防災・防犯の取り組みについて高評価で安心と信頼につながっている。 ・多文化共生教育は、学校での学びが家庭・地域へ広がり、「共に生きる」土台になっていると感じる。韓国朝鮮やフィリピンに偏った教育なのではという自由記述もあったが、保護者がもっと学校の取り組みの中身をしっかり見るべきではないか。 ・学校からの情報提供について、児童から保護者へ手紙が渡っていない実態が見られるが、地域でも情報の周知に苦慮している実態がある。どんなに工夫して発信しても最終的に家庭での取組みに依存するしかなく、課題である。 	<p>日常的な人権尊重教育をベースとした、多様性を認め合い共に育つ子の育成に向けて、児童や保護者の思いに寄り添った丁寧な対応、個に応じたきめ細かな指導・支援を続けてきた。人員不足のため最良の体制とは言い難く、一部の職員に負担をかけてしまった。次年度も学校全体で児童を見守り育てていくという共通認識のもと、確実に速やかな情報共有とそれを支援に生かすための体制づくりに努めていく。同時に児童の基礎的な学力、特に言葉で表現する力の底上げを図りながら、児童のGIGA端末の活用場面を増やし、本校の実態に沿った個別最適で対話的・主体的な学びの実現に向けて授業改善、授業力向上に取り組んでいく。学級活動を通じた校内研究では、1年目ということもあり、児童の言葉の力が大きく育つところまではいかなかったが、どの学年も話し合い活動にきちんと取り組んだことで、教員の学びとなり今後を生かせる力がついた。次年度は教科を定めず、児童の表現する力の育成に焦点を当てて研究を進めていく。</p>